

守屋荒美雄と帝国書院

「地理教育の父」の足跡を旅する

伊藤 智章

第3回 上京

新橋駅

守屋荒美雄が東京に出たのは明治29年（1896年）、25歳の時である。当時の東京の玄関口は新橋駅で、東京駅ができるのはその15年後である。現在の東海道線、山手線の新橋駅前から東へ2、3分。「汐留シオサイト」内に2003年に復元された旧新橋駅の駅舎とホームのモニュメントがある（写真1・2）。



写真1・2 旧新橋駅の駅舎とホームの復元モニュメント

東海道線が神戸まで全通したのが明治22年7月1日である。その先、私鉄の山陽鉄道が明治24年に、神戸から倉敷まで通っている。翌年、尾道まで延伸され、馬関（下関）まで汽船の航路が開設された。日清戦争（明治27年～28年）で広島城に大本営が置かれ、山陽路の交通が急速ににぎわいを見せていた時代である。

倉敷から神戸までは汽車で約4時間、神戸から新橋まで約20時間かかった。丸一日以上かけて東海道を東に進んだ荒美雄は、どんな思いで車窓を眺めたのだろうか。荒美雄20代前半の彼の足取りを追う。

「校長」からの転身

18歳で「授業生」（見習い教員）としてキャリアをスタートさせた荒美雄（幼名：荒三）だが、上京当時は、小学校教員として、地域でも一目置かれる存在にまでなっていた。19歳で準訓導、20歳で小学校の正教員、21歳で高等小学校の教員資格を得た。途中、家庭の事情で職を辞し、一時期神戸で肉体労働に従事する時期もあったが、勉学を続け、主に数学を担当する教員として倉敷周辺の小学校で勤務した。

当時の倉敷周辺は、小学校の開設ブームだった。しかし、現在の公立学校と違い、校舎の建設や教員の調達は、各村の村長や村民が自分たちで行うのが基本で、寺の境内を借りた寺子屋同然の学校もあった。師範学校への進学や、資格認定試験で教員になろうとする人が増えた。どちらの試験も高い倍率を維持するようになった。身分や経済力に関係なく、実力次第で栄達できる教員や公務員に希望を託す若者が増えた。ちなみに、荒美雄が19歳の時に合格した小学校簡易教員（準訓導：師範学校卒資格）試験の受験者は270名、合格者は22名だった。受験資格が20歳以上とされていたため、荒美雄は、「明治3年生まれ」と、年齢を偽って受験したという。

教員資格を得た荒美雄は、19歳で児島湾の干拓地に新設された尋常小学校の校長を任される。子供たちを教える傍ら、教具や図書の購入のために村長と渡り合うなど環境整備に努めたという。この時の実績が評価され、翌年には隣村の隣町の長濱村（現：倉敷市下津井町）に招かれ、この地で4年間を過ごす。下津井は、北前船の風待ち港として栄えた風光明媚な港町は活気にあふれた港町である。現在は、瀬戸大橋を間近に見ることができる（図1）荒美雄同様に、働きながら更なるキャリアアップを志す若い同僚も多かったようである。荒美雄は、この地で20歳から24歳まで過ごし、23歳で新設校の校長に就任した。

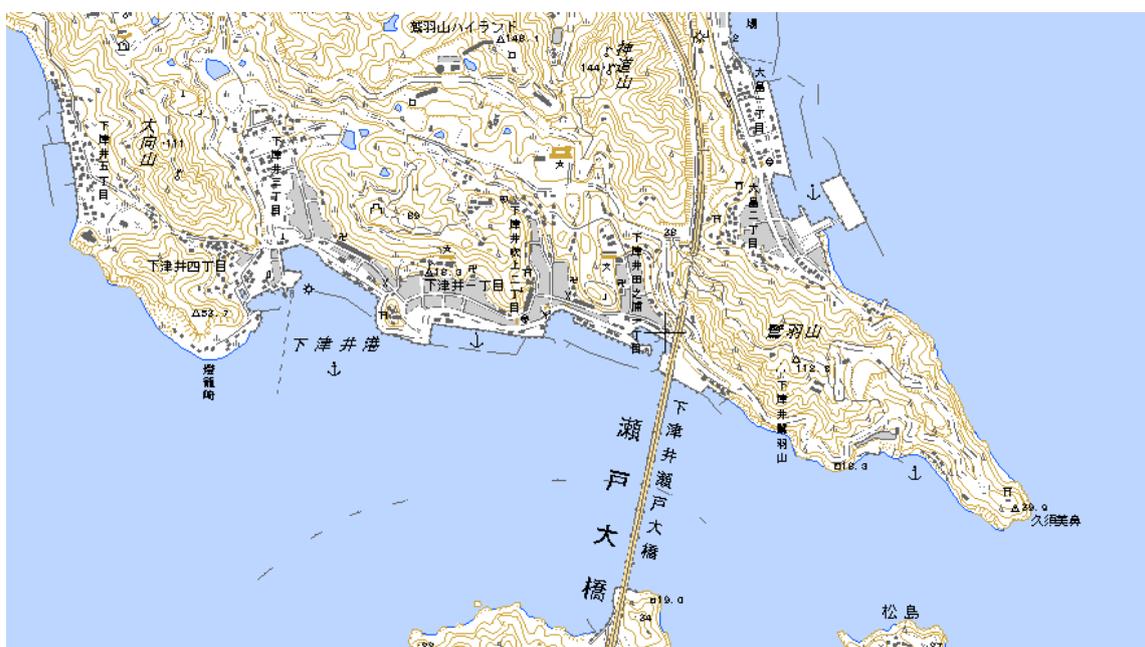


図1 倉敷市下津井町付近（2万5千分の1地形図：「下津井」より）

21 歳になると、荒美雄は分教場の教場長に任命された。今でいう新しい学校の開設準備室長的な立場も兼ねており、当時としても大抜擢の人事だったようである。観音寺の本堂を使っていた分教場に着任した荒美雄は、授業の傍ら開校準備、特に新校舎の建設事務に奔走する。地元の大工との交渉や、現場監督的な仕事もこなしたようである。明治 27 年 3 月、当時としては珍しかった洋式の校舎で開校式に臨んだ（写真 3）。尋常長濱小学校は、現在の倉敷市立下津井東小学校に引き継がれている。

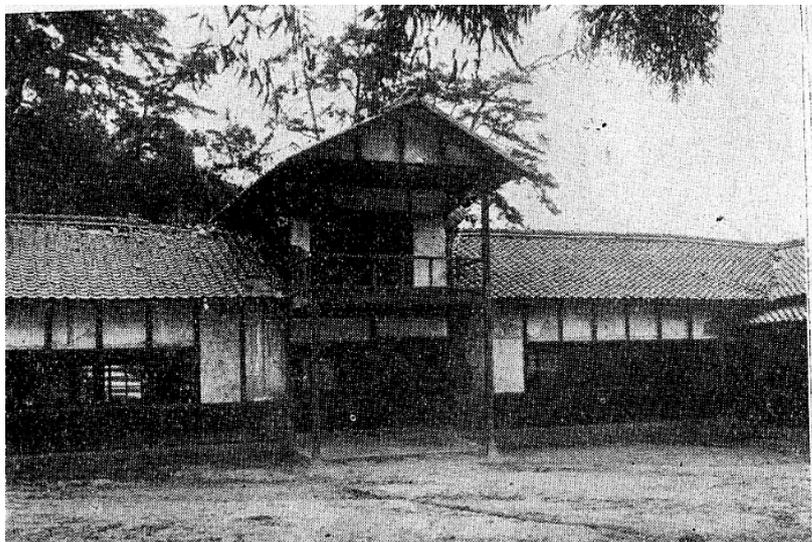


写真 3 新築された尋常長濱小学校の校舎（『守屋荒美雄傳』より）

一見、順風満帆の青年時代である。このまま倉敷の教育界で地位を高めていくという選択肢もあったと思われる。しかし、校務と自身の試験勉強に明け暮れた生活は、体に負担をかけたようである。父、鶴松が病に臥せ、荒美雄自身が肺病を病んだこともあり、明治 28 年、荒美雄は住み慣れた下津井の街を離れて、5 年ぶりに郷里に戻る。母校である西ノ浦高等小学校に勤務しながら、父の看病を始めたが、同年、父は 57 歳でこの世を去る。

荒美雄が、「文検」の予備試験（岡山で受験）に合格し、本試験の受験のために上京の準備をしているという噂は、同僚だけでなく、村の上層部まで伝わった。管轄する浅口郡の郡長が学務書記（今でいう教育委員）を連れて止めに来たという。教員としての実力もさることながら、病身をおして仕事と受験勉強の両立を続ける彼の身体を心配してのことだろう。二人の妹も強く反対した。ただ母、飛天（ひで）だけは、全く反対しなかったという。幼い頃の虚弱体質を心配して、尋常小学校入学を 2 年遅らせたほどの母である。荒美雄は母に「知事級の人物になるまで絶対に帰ってこない」と母に言い残して故郷を後にした。まずは文検に、最終目標として「高等文官試験」（現在の国家公務員 I 種試験）合格をめざして、25 歳の青年は、東を目指したのである。

文検

ここで、荒美雄が目指した「文検」について、簡単に触れておきたい。正式には文部省教員試験という。高等小学校までの教員資格認定は、県が実施していたのに対して、中学校、師範学校、高等女学校の教員資格試験は文部省、すなわち東京でのみ行われていた。合格すると高等師範学校卒と同等の資格が得られるものである。明治18年（1885年）から昭和18年（1943年）までの59年間に、計78回行われている。文検「地理科」の試験の形態や制度の変遷については、佐藤由子の『戦前の地理教師—文検地理を探る』（1988年：古今書院）に詳しい。

試験はまず、各府県で予備審査（1次試験）が行われ、合格者が文部省において本試験に臨む。荒美雄が受験した明治29年の合格者数は20名。ただし、この当時の地理科は「地誌」と「地文」が別科目だったため、同じ人物が両方に合格しているので、実際数は更に少ないとみられる。受験者数は、同書によると、やや時代が下がるが大正15年度で総数5204人、地理科の受験者は427人、47名が本試験に進み、17名が合格している。佐藤は、日本地理学会の会員数が70名に過ぎなかった昭和5年（1920年）に、機関誌『地理学評論』の発行部数は1000部あったという事実を踏まえて、文検地理科の受験予備群は相当数に上ったという認識を示している。

後に帝国書院を興した荒美雄は、文検受験者や中学校教員を読者に据えた雑誌『地理学研究』を創刊（大正13年）し、文検受験者のための受験対策講座や、模擬実験講座（当時は地学の実技試験があった）を頻繁に行っている。30歳代で、彼が教科書執筆のきっかけをつかんだのも、彼が文検受験者向けの参考書として出版した「講義録」の評判の高さからである。

荒美雄は、高等小学校時代から数学が得意で、倉敷時代も数学者日いて代数学を研究するほど熱心だったという。傍ら、東京の早稲田大学の校外生（通信教育学生）になり、法学の研究も行っており、一見、地理学とは縁の薄い青年だったように見受けられる。ただ、母、飛天の唯一の楽しみが、子供たちを連れての神社仏閣詣でだったこと、幼い頃から、病気がちだった荒美雄が好んで読んだのが『十八史略』などの歴史書だったこと。歴史の舞台をより深く知るために地図や地理書に手を伸ばして、地理に対する興味が高まったことが、荒美雄を「地理」にかきたてた動機だったのではないかと『守屋荒美雄傳』の著者は述べている。同書が、刊行に向けて執筆途中だった氏の自伝をベースに書かれている事を踏まえると、ほぼそのような理由であると見てよいだろう。

いずれにせよ、彼が文検の受験を考えなかったら、受験科目に「地理」を選択しなかったら、後の地理教育の歴史は大きく変わっていたに違いない（写真4）（写真5）。

上京し、文検受験を目指した荒美雄を受け入れたのは、同郷の大橋雅彦という人物だった。大橋は、荒美雄の尋常小学校時代の美術教員で、上京後、東京美術学校に入学し、卒業後、東京府立師範学校教諭を務めていた。

明治29年5月1日に新橋駅着、5月中旬に行われた文検の本試験に合格し、6月10日付で、荒美雄は文部省より地理地誌科の中等教員免許状を下付された。しかし、すぐに中学校の教員の仕事が来ることはなかったため、荒美雄は、師の勧めもあり、小学校教員の職を得る。途中、高等文官試験（現在の国家公務員Ⅰ種）試験の受験を画策して、友人と共同で下宿を借りて勉強に励んだり、教育雑誌に論文を投稿するなどしながら、中学校からの採用の内示を待った。

明治30年2月、待ちに待った辞令が下りた。しかしそれは荒美雄にとっても、周囲にとっても全く想定しない、青森の師範学校からであった。東京に来て1年足らず。まだ雪が残る青森に向けて、荒美雄は、再び車中の人となる。

つづく